

キリストの使徒たちが伝えたこと(4)

—使徒信条とは—

「父なる神(2)」

使徒信条

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父(ちち)なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。

我は聖霊を信ず。

聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。
アーメン。

1. はじめに

(1) 使徒信条について

- ①三位一体論を土台とした信仰告白である。
- ②キリスト論が一番強調されている。
- ③使徒信条は、使徒たちの作品ではないが、使徒たちの教えが要約されているので、使徒信条と呼んでもよい。
- ④洗礼式のために、また、異端との戦いのために必要となった。

(2) 父なる神について(1)

- ①聖書が使用する比喩的言葉について
- ②父なる神という言葉について
- ③人格を持った神という概念について

2. アウトライン

- (1) 全能なる神
- (2) 創造主なる神

このメッセージは、父なる神についての2回目の考察である。

I. 全能なる神

1. 神はご自身を「全能の神」(エル・シャダイ)として啓示された。

(1) 創17:1

「アブラムが九十九歳になったとき【主】はアブラムに現れ、こう仰せられた。
『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ』」

- ①神はアブラムに、サラが男の子を生むと約束された。
- ②さらに、そこから多くの子孫が増え広がると約束された。
- ③命の誕生という文脈の中で、この言葉が使われている。

(2) 全能という意味は、「なんでもできる」ということである。

- ①神に不可能はない。
- ②神はどんなものにも負けることはない。

(3) 神の全能に関する質問(1)

- ①神は、角が4つある三角形を描くことができるか。
- ②神は、自分でも持ち上げられないくらい重い岩を造ることができるか。
- ③神は、非論理的な質問に束縛されないお方である。

(2) 神の全能に関する質問(2)

- ①神は、神を愛している人に働きかけて、神を憎むようにさせることができるか。
- ②神は、自分で約束したことを、破ることができるか。
- ③神は、ご自身の性質に反したことはなさない。
- ④人間が考える「全能」とは異なる。

(例話) 無人兵器、無人ロボットの問題。映画『ターミネーター』の世界。

2. 神はご自身を【主】という名で啓示された。

(1) 出6:2~3

「神はモーセに告げて仰せられた。『わたしは【主】である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、全能の神として現れたが、【主】という名では、わたしを彼らに知らせなかった』」

- ①【主】と訳された言葉は、ヤハウエである。
- ②ヤハウエとは、契約の神の御名である。
- ③神はモーセ(イスラエル)に、ご自身の性質を啓示された。
- ④神はモーセ(イスラエル)との、より親密な関係を求められた。

(2) 神はご自身の「全能」という性質に、制限を設けられた。

- ①神の性質に反することは行わない。
 - ②アブラハム、イサク、ヤコブと契約を結び、その契約によってご自身を制約することを選ばれた。
 - ③必ずしも、そうする必要はない。これは、神の選びである。
 - ④それゆえ、神が約束を破ることは絶対でない。
 - ⑤これは神の栄光に係ることである。
- (例話) 今日の課題として、食品の偽装問題、権力に対する懐疑などがある。

(3) 神の自己制限の際たるものは、御子の受肉である。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」(1ヨハ4:10)

- ①御子の辱めの目的は、人類との親密な関係の回復である。
- ②神が罪人である私たちとともにいるための唯一の方法は、御子のへりくだりである。
- ③全能という神の性質は、御子の辱めという形を取って啓示された。
- ④これこそ、キリスト教の神髄である。

II. 創造主なる神

1. 天地創造に関する4つの立場

- (1) 文字通り7日間の創造である。
 - ①創世記1~2章の「日」は、24時間である。
 - ②これは、約150年前まで最も多くの支持を集めた立場である。
 - ③積義的には、これが最も正しい。
- (2) 「日」とは「ある期間にわたる時代」を指す。
 - ①科学的論考との調和を図ろうとする立場である。
 - ②聖書信仰から言うと、非常に不安定な立場である。
- (3) 神が進化論の過程を導かれた。
 - ①進化論を正しいと認めた立場である。
- (4) 7日間は、創造の業を説明するための「枠組み」である。

2. 創造の教理の重要性

- (1) 創造に関してどういう立場を取るかで、その人の聖書観が決まってくる。

- ①聖書は、神のことばであるかどうか。
- ②聖書は、誤りを含まない真理の書であるかどうか。

(2) 聖書観が異なると、神学(救いの理解)も異なる。

- ①創1~2章の天地創造物語は、約束の地に入る直前のイスラエルの民のために書かれたものである。
- ②彼らは、自分たちがどこから来て、どこに向かう民なのかを知る必要があった。
- ③彼らに土地を与えてくれる神が、どのようなお方であるかを知る必要があった。
- ④聖書の啓示は、創1~2章が歴史的記録であることを前提に、展開していく。

(3) 創1~2章が「ユダヤ人の神話」ならば、それ以降の啓示はその意味を失う。

- ①結婚と言う概念は、神が人を男と女に創造されたところから出ている。
「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」(創2:24)
- ②救済論は、アダムという実在の人物がいたことを前提に成り立っている。
「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです」
(1コリ15:21~22)

3. 創造の教理が意味するもの

(1) 積極的な世界観が与えられる。

- ①神は無から有を創造された。
「初めに、神が天と地を創造した」(創1:1)
- ②「バラ」(創造する)は、神にのみ使用する動詞である。
- ③被造世界は、本来よいものである。
「神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された」(創1:4)
- ④隠遁的生活は、本来聖書的ではない。
- ⑤被造世界に存在する欠点は、人間の罪によるものである。
- ⑥被造世界は、やがて本来の姿を回復する。

(2) 神と被造の世界の区別が可能になる。

- ①墮落した人間には、被造物を偶像化する傾向がある。
「それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる

方です。アーメン」(ロマ1:25)

②神は自然界を通して私たちに語っておられる。

「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです」(ロマ1:20)

(3) 神が被造世界の所有者であることが明らかになる。

①人間も、神によって創造された神の所有物である。

②人間は、被造世界の所有者ではなく、管理者として立てられている。

(4) 人間の本質が明らかになる。

①人は「神のかたち」に造られている。

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」(創1:26~27)

②「神のかたち」が意味するもの

*神の支配権が人の上に及ぶ。

*神の性質(知性)が人間に与えられている。

*神と交流することが可能である。

・責任(responsibility)

結論:

1. 私たちの神は、全能の神である。

(1) 神はご自身の力の行使を制限された。

(2) イエス・キリストの福音は、その表現である。

2. 私たちの神は、天地創造の神である。

(1) 私たちの存在意義は、天地創造の教理の中にある。

(2) コロ1:26~27

「これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」

①内住のキリスト

②ユダヤ人と異邦人の区別なく、同じ恵みを受ける。

③栄化された私たちの姿は、キリストの中に隠されている。

